

ぼくも、認定ジオガイドに
なってみようかな



出雲神話語り部の会・認定ジオガイド
北原 郁子さん

素晴らしい景観と史跡に、物語の視点を

25年ほど前に神奈川県から松江市に移住してきた北原さん。それまで島根にはまったく縁がなかったとありますが暮らしてみるとたちまち出雲地方の雄大な自然や神話の世界に魅了され、歴史好きだったこともあり「もっと知りたい、勉強したい」と思ったのがガイドになったきっかけです。公募されていた「出雲國まほろばガイドの会」に入り、ガイド同志のつながりを深めながら、「出雲神話語り部の会」や「出雲大社かたりべガイドの会」、「出雲國たたらガイドの会」など活動の場を広げ、今ではガイド歴20年余りのキャリアとなりました。「風土記の丘周辺、出雲大社、日御碕など古代出雲文化の史跡や遺産を案内していますが、はじめの頃は点としての説明しかできなかったのですが、やっと点と点を結び線として説明できるようになりました」とい

います。北原さんのガイドスタイルは「楽しんでもらう」こと。旅の一コマとして充実した時間を届けることを心掛け、学びを続け、人と出会うことで自分が元気になるのがガイドの魅力を話します。北原さんが「語り部」としてガイドする稲佐の浜から日御碕に至る海岸線では、ジオで学んだことを実感として伝えながら、筆投島、つぶて岩など物語の視点を加えるとさらに興味を持ってもらえるといいます。ガイドに興味がある人へ「視野が広がり、見える世界も変わります。知らなければ気付かないものを次世代に継いでいくためにも、ぜひやってみて」と話していただきました。



島根県立八雲立つ風土記の丘にある窪穴式建物

小泉八雲とセツが見たジオの風景③

八雲たちが訪れた美保関
にぼくも行ってみたいな。



ぼそあ
げげ



【美保関】

1891(明治24)年の8月、八雲とセツの二人は伯耆(鳥取県の中西部)方面に半月程度の旅に出ました。最後の5日間は美保関に滞在し、美保神社の参拝や、水泳などを楽しみました。美保神社の江戸時代末の寄進である唐獅子の大きさ、高さに圧倒されたと言います。

八雲は、路地の幅3メートル程度の青石畳通りを見て、海よりの家の2階から山際の家の2階までひょいと跳んで渡れそうだと感じたそうです。

また、宝寿寺に惹きつけられ、本堂で地域の少女、幼女たちがこしらえ、菩薩様に奉納した縫物・編み物・刺繍など様々な針仕事の色鮮やかな作品に出会いました。

八雲たちが宿泊した島屋旅館は、青石畳通りの東の端にあった小奇麗な2階建ての旅館で、石灯笼、太鼓橋が真中に浮かぶように美保湾内が見えます。現在は島屋旅館跡地に公園ができており、八雲夫婦と長男一雄のレリーフがあります。

卵好きの八雲が、美保神社の神様は鶏嫌いで美保関では鶏はタブーだと聞き、何食わぬ顔で卵を頼んでみたら、「アヒルの卵ならあります」と出してくれたというエピソードを紹介しています。

美保関から小型蒸気船で中海を2時間かけて渡り、松江に帰っています。八雲はこの時の様子を「美保関」で記しています。

【参考文献】
「小泉八雲の足跡探訪 松江出雲隠岐諸島の旅」島根半島四十二浦巡り再発見研究会／『神々の国の首都に住まふ443日』小泉八雲記念館
「しまね観光ナビホームページ」公益社団法人島根県観光連盟

令和7年9月20日「小泉八雲とセツの足跡を辿るジオの旅(美保関編)」の様子



青石畳通りで八雲に思いを馳せました



八雲が滞在した島屋旅館跡地には八雲夫婦と一雄のレリーフがあります



編集後記

当協議会は2月にジオガイドの認定試験を行います。受験者の皆様には、試験に向けて専門的な知識を深めてもらうため、夏から冬にかけてジオパークに関する座学やフィールドワークに取り組んでいただきました。その成果を試験に発揮していただき、ジオガイドとして当ジオパークの魅力を多くの人たちに伝えてもらいたいです。ジオガイドの養成講座と試験は毎年ご案内しております。ご興味のある方は来年度には是非チャレンジしてみてください。

発行者：島根半島・宍道湖中海(国引き)ジオパーク推進協議会

【松江市役所 文化振興課 ジオパーク推進室】

〒690-8540 島根県松江市末次町 86 番地
TEL：0852-55-5399
E-mail：kunikiki-geopark@city.matsue.lg.jp

【出雲市役所 文化財課】

〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地
出雲弥生の森博物館内
TEL：0853-25-1841
E-mail：yayoi@city.izumo.lg.jp



島根半島・宍道湖中海ジオパーク 日本ジオパークネットワーク



島根半島・宍道湖中海

ジオパーク通信

出雲国風土記の
自然と歴史に出会う大地

2026.2
Vol.13

ジオパーク推進協議会会員の紹介/地質サイト見どころ紹介 13 1
ジオパーク推進協議会の活動 2
島根半島・宍道湖中海ジオパークと人々の営み/ユネスコ世界ジオパーク紹介 3
ジオガイド紹介/小泉八雲とセツが見たジオの風景③ 4

ジオパーク推進協議会会員の紹介 島根県地学会

地質学を
教えて
もらおうかな



©DLE

島根県の地質や地形を網羅的に研究、その果実を活かす。

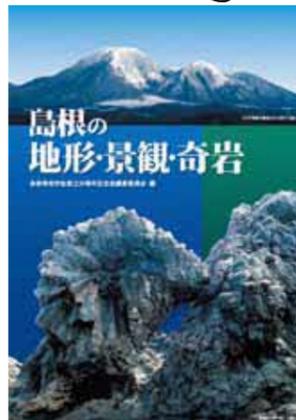
島根県地学会は、島根県の地質図と地質情報を集成した書籍「島根県の地質」の作成に当たったメンバーを中心に設立された会で、県内の特徴的な地形・景観・奇岩などを学際的に調査・研究し紹介する活動を40年間続けてきました。その会長を務める中村唯史さんは島根大学で地質を専攻し、宍道湖・中海と周辺の沖積平野の古地理や古環境を研究しました。現在は三瓶自然館に勤務しているほか、石見銀山のまちづくりに関する活動を行うNPO法人石見銀山協働会議の理事長を務めています。



島根県地学会会長
島根県立三瓶自然館学芸員
中村 唯史さん

「地学会では野外地質見学会や会誌での研究発表を主な活動として、これまでに地学的な情報を蓄積してきました。今後はそれをどのように活用していくかが課題のひとつです。たとえば子どもたちへの教育に活かせるのでは」と中村さんは期待します。地学的な情報を活用したいと考える根底にあるのは、大学時代の指導教官から教示を受けた「地質学は社会に役立つものでなくてはならない」という言葉だと言います。

「土地の成り立ちと人々の暮らしはつながっています。地質や地形、鉱物資源、気候風土など、地学的な要素が人々の暮らしの根底にあり、地域性を生んでいる。それを地域のストーリーとして伝えることで、地域への興味が生まれ、地域の持続にも貢献できるのではないかと考えている」と話していただきました。



「島根の地質・景観・奇岩」(島根県地学会創立30周年記念誌)、島根県地学会のホームページから申し込むとPDFが無料で送られます。

地質サイト見どころ紹介シリーズ 13 「地蔵崎」



美保関灯台から五本松公園まで山歩きができ、5月上旬はツツジが見頃です。

地蔵崎は島根半島の東端にあり、約2000万年前から1800万年前の日本海形成以前の“大陸分裂の時代”の地層である古浦層の砂岩・泥岩・凝灰岩が露出しています。

地蔵崎の沖合い4kmには沖の御前島があり、この島の岩石は約1600万年前の活発な海底火山を示す流紋岩からできています。また、古事記の出雲神話に出てくる糸びす様こと「事代主命」が鯛釣りをしていたとされる伝説の名所です。

美保関灯台は1898(明治31)年に海岸に分布する砂岩(森山石と呼ばれます)を使用して建てられました。門扉に使われた石は長年の風化作用を受けたため、砂が堆積した太古の湖岸域の水の流れの様子を分かりやすく示しています。

美保関灯台は、2022(令和4)年に国指定重要文化財に指定されており、1998(平成10)年にはIALA(国際航路標識協会)の総会において、歴史的・文化的価値のある文化遺産として「世界の歴史的灯台100選」に選ばれました。

地蔵崎には3ヶ所の展望デッキが整備されており、日本海の雄大な眺めと、晴れた日には隠岐島や大山を望むことのできる景勝の地です。近くには美保神社や青石畳通りもありますので、これから暖かくなりましたらぜひお出掛けください。



空撮した地蔵崎と美保関灯台



地蔵崎から眺望できる沖の御前島



地蔵崎の地形

ジオパーク推進協議会の活動

日本ジオパーク再認定審査



桂島(松江市島根町)
地元の皆様が作成した桂島の地形や植物のパネルなどを説明



日御碕(出雲市大社町)
ジオガイドが日頃のガイドの様子を紹介

日本ジオパークは4年に一度、再認定審査が行われ、前回の審査で指摘された課題への対応状況や、自然環境の保全、教育活動の状況などについて確認されます。島根半島・宍道湖中海ジオパークは2017(平成29)年12月22日に日本ジオパークの認定を受け、2021(令和3)年度に1回目の再認定を取得し、2025(令和7)年度に2回目の再認定審査を受けます。

当ジオパークが前回の再認定審査以降の活動報告書を審査機関である日本ジオパーク委員会に提出し、この報告書をふまえて調査員が活動状況を確認するため現地調査に訪れます。

2025(令和7)年11月22~24日に調査員2名が訪れ、現地調査が行われました。当ジオパークで活躍している地域の皆様が活動を紹介します。調査員からは一定の評価をいただきました。今後現地調査員からの報告を受け、日本ジオパーク委員会が審査を行います。

審査結果は2026(令和8)年1月末に公表され、「4年間の再認定」、または早急に解決を要する重要な問題点があると判断された場合の「2年間の条件付き再認定」のいずれかになります。

(本号を発行する時はすでに結果が公表されていますので、「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」ホームページでご確認ください)

日本ジオパーク委員会や現地調査員のアドバイスを受けて、今後さらに活動を推進していきます。皆様におかれましては引き続きご支援、ご協力をお願いします。



松江市美保関公民館
地元の皆様のジオパーク活動を紹介します



竜溪洞(松江市八束町)
ジオガイドが溶岩トンネルを案内



モニュメント・ミュージアム来待ストーン(松江市宍道町)
学芸員が来待石の伝統や歴史などについて説明



一畑薬師ビジターセンター(出雲市小境町)
島根半島四十二浦巡り再発見研究会の展示施設を視察



松江市長(ジオパーク推進協議会会長)と出雲市長(ジオパーク推進協議会副会長)も調査員のヒアリングに対応



現地調査に協力いただいた皆様、ありがとうございました。



島根半島・宍道湖中海ジオパークのジオストーリー ~大地とそれに関連する生物・生態や人々の営みの物語~ 全国に誇れるかけがえのない樹木景観の築地松

高木のマツを刈り込んだ散居集落の屋敷林は他に例がなく、優れた景観です。



沖積平野である出雲平野には屋敷林に囲まれた大規模な散居集落が点在しており、屋敷林の樹種はクロマツで、10mを超えるマツはきれいに刈り込まれています。築地松と呼ばれるこの屋敷林は家屋の北・西側にあり、冬季に吹き付ける強い北西の季節風をささぎるためといわれています。

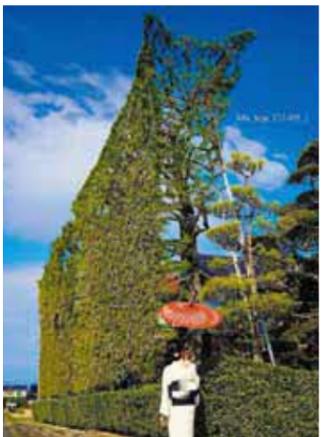
築地松は約300年前に誕生したと考えられており、最初からマツが植えられていたわけではなく、出雲平野には稲作に適した肥沃な湿地が広がっており、耕地を求めて進出した農民は、時々起こる川の氾濫から小屋を守るために周囲に土塁(築地)を設置しました。そして初期には土塁を保護するためにタケ類を植え、徐々に土地が乾燥してくるとタブノキなどの常緑広葉樹を植えるようになりました。

堤防が強化され洪水が少なくなりさらに乾燥が進むと、北西の季節風を防ぐために乾燥地を好むクロマツが植えられるようになりました。そして、肥沃な土地で作物の収穫量が多いことから生活に余裕ができ、競ってマツを刈りこむようになりました。

築地松の独特の樹木景観は、単なる防風林に留まらず、芸術の域に達しており、全国に誇り得るかけがえのない文化遺産です。築地松を後世に残していくため、住民と行政が一体となって保全に努めるとともに、広く情報発信に努め、散居の特性を生かしたまちづくりを推進しています。



築地松



国引きフォトコンテスト2024
歴史と文化部門
最優秀賞「横から見た築地松」

築地松が並ぶ散居集落

ユネスコ世界ジオパーク糸魚川ジオパーク紹介 新潟県糸魚川市 ~フォッサマグナとヒスイのまち~

ほくもヒスイ海岸に行ってみよう!



糸魚川ジオパークと言えば、日本列島誕生の謎を秘めた地質の溝・フォッサマグナと糸魚川-静岡構造線、プレート境界で生成される希少なヒスイ(翡翠)がイチオシです。

日本の国石、新潟県の石、そして糸魚川市の石でもあるヒスイは、神話の時代に大珠や勾玉などの装飾品に加工され、国内のみならず朝鮮半島まで伝わりました。遣唐使の献上品リストにもヒスイが載っており、真名井遺跡(出雲市)から出土した出雲大社の「翡翠勾玉」(重要文化財)も糸魚川産ヒスイです。日本最古の歴史書『古事記』や『出雲国風土記』に綴られる大国主命と奴奈川姫の恋物語も含め、ヒスイを縁とする悠久のロマンを感じさせてくれます。

昨年開催された2025日本国際博覧会(大阪・関西万博)でも、我が国の文化や歴史に大きな影響を与えた石として、「静けさの森」や「迎賓館」に糸魚川産ヒスイ原石が常設展示されました。

ヒスイを楽しむなら、糸魚川駅のジオパルからフォッサマグナミュージアム、小滝川ヒスイ峡、最後にヒスイ海岸での石探しがおススメの「鉄板コース」です。知的好奇心を満たすジオパークの旅に出かけてみませんか? 皆様のお越しをお待ちしています。



フォッサマグナパーク



フォッサマグナミュージアム



関西万博で展示された糸魚川産ヒスイ原石



ヒスイ海岸での石探し